

メロディー ローマ

ピザを切るおやじの陽気な素振りに
旅の終りの近いことも忘れ去った後
ひとり店の外でふかす煙草の煙と共に
おずおずと歩き出すヴィオラの調べ
次第に確かな足取りとなってやってくる

僕を優しく慰めるように包む中から
まるで遥か遠くの国からやって来るように
次々と僕の前をとおり過ぎる人、人、人...
それは今聞こえているメロディーの音符に
調子を合わせて夜気の中から現れ、また、消え...

そうした繰り返しのうちに高まってゆく
店の中のざわめきが加わり
車の走り過ぎてゆく低い響きが加わり
街の灯りから溢れ出てくる——音楽

ああ、僕の中へ街の感情^{こころ}が流れ込んでくる

ふと、店の中から僕に言葉がかけられる——
我に返った僕は胸の中に宿ったものを
今までに感じたこともないふくらみを見つけ
再びそれがどこかへ流れ去ってしまうのを恐れ
ひとり、仲間を離れて帰る

(1984.4.28)